

# アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



オーギュスト・ロダン（一八四〇—一九一七）  
《バステイアン・ルパージュ》  
ブロンズ 一八八七—一八八九年  
一七五×九二×八二cm

ジュール・バステイアン・ルパージュ（一八四八—一八八四）は、十九世紀フランスの画家である。外光の効果をとり入れた自然主義の画家として活躍し人気を博したが、三十代半ばで病魔に倒れた。この早すぎる死を悼み、画家と近しかった人々は、その故郷ダンヴェイエの街に記念像を設置すべく動き始める。そして《バステイアン・ルパージュ》像は一八八九年に落成するが、これを制作したのがロダンであった。

本作は、この記念像の铸造番号「N. 1171」のものである。パレットを片手に力強く前脚を踏み出す画家の姿は生気に満ち、在りし日にみせていた輝かしいまでのその才能を彷彿させる。生前の画家と親交があったロダンであればこそ、成し得た表現であろう。

（学芸課長 三谷理華）

No.  
**135**  
2019年度 | 秋 |

# 浜松になぜ凱旋門が？

館長 木下直之

浜松で生まれ育った私にとって浜名湖は池みたいなもの、中学高校のころには湖畔を自転車で走り回っていました。しかし、その奥の引佐町に凱旋門があるとは知らなかった。

教えてくれたのはドイツ文学者の池内紀さん。話を聞かされた時、私の顔がほんの一瞬こわばったらしい。「ご当地の逸品を見逃していたとは、うかつ千万——われ知らず「近くて遠いモノ」の先生の鼻をあかしたわけだ」と得意気に書いています（池内紀「鼻をあかす」『木下直之を全ぶ集める』ギヤラリーエークワッド [website](http://www.ekwadd.com)）。

それは今から三十年も前のこと、池内さんからいただいた手書きの地図入り葉書を「凱旋門」と題したファイルに大切に綴じ込んであります。

ある関心が芽生えて、うまく育ちそうだなと思った時点で、ファイルを一冊つくることを若いころからずっと続けてきました。「凱旋門」ファイルは全部で四冊ありますから、大きな木にまで育ったテーマかもしれない。ファイルには青柳正規「ローマ記念門に

おける三角小間装飾の変遷」(『芸術研究報』三)や京谷啓徳「はりぼて凱旋門の語るもの——十六世紀の君主の入城式におけるアッパレートに関する覚書」(『西洋美術研究』十二)といった西洋の凱旋門に関する先行研究も含まれるものの、大半は明治期の日本に出現した凱旋門に関する資料です。

雑誌『日清戦争実記』第三十編の記事をちょっと覗いてみましょう。戦争が終わり、大本営が置かれていた広島から帰京する明治天皇を迎えた静岡市内の様子です。明治二十八年(一八九五)五月二十九日のことでした。

「静岡市の大緑門の頂面には、駿河細工の竹器を蓋にして、朱塗の菓子器を瓣にしたる菊花をつけ、其下に額面と見せたる行燈(夜は燈火を點ず)を懸けたるが、其の中央なる「奉祝」の二字は安陪茶にて作り、周囲の額縁をば、名産の夏蜜柑と椎茸にて飾り、中々の思いつき、御沿道の細工物中かくの如きは珍しかりき」(「大元帥陛下の御還幸」)

私が追いかけてきた凱旋門がどのよ

うなものであったか、お分かりいただけましたか。「緑門」とは植物で飾り立てた門を指すのですが、それはなんと、静岡名産品でつくった凱旋門。戦時にも(戦時だからこそ)、見立て細工、つくりものが登場することを面白がってきました(拙著『戦争という見世物』乞うご覧)。

しかし、浜松の凱旋門はそうした仮設のつくりものではなく、煉瓦造の建造物でした。だから今も同じ場所に建っている！それは日露戦争が終わった翌年、明治三十九年(一九〇六)三月に、引佐町最北端の渋川という集落の入り口に建てられました。門をくぐる

と六所神社へとつながっていますから、どうやら鳥居を兼ねたようです。アーチの上に「凱旋記念門」と大きく記され、柱の基部に出征兵士の名前とこの門を建てた寄付者の名前がずらりと刻まれています。出征は日清戦争にまでさかのぼります。ざっと数えたところ、日清では十六人、日露では六十三人が渋川からはるか異国の戦場へと駆り出されました。そして、最後に

戦没者二人、病没者三人の名前が登場します。戦勝記念であるとともに、慰霊碑の役割を果たしているのですね。

凱旋門と聞けば、誰もが真っ先にパリのエトワール凱旋門を思い浮かべるでしょう。ナポレオンがアウステルリッツでの戦勝を記念して建設に着手し、死後の一八三六年に完成しました。現在もなお、フランス共和国の無名戦士の墓として使われています。

古代ローマの凱旋門を模したその姿はとんでもなく古いのに、実は近代の建築であることに驚かされます。そして、それは十九世紀が終わらないうち

に日本にまで波及したことになります。日清戦争でも日露戦争でも、凱旋門は林立しました。根強くあつたつくりものの伝統がそれを受け止めたことは間違いないませんが、西洋においても、古代でもルネサンス期でも祝祭のための仮設建築が主流で、モニュメンタルな建築は例外でした。

そう考えれば、浜松の凱旋門は貴重な事例です。ほかには鹿児島県始良市の山田凱旋門(明治三十九年建設、石造)しか残っていません。こちらは昨年の夏によくよく訪れることができました。やはり山間の小さな町にあり、「凱旋門前」というバス停で、一日に四本しかない駅に戻るバスを待ちました。\*執筆中に、池内紀さんの訃報に接しました。ご冥福をお祈りします。

# 大屋美那の仕事

## ―松方コレクションのロダンの铸造問題について

黒川 弘毅  
武蔵野美術大学教授

の反応を冷静に分析して公表されたと推測されますが、大屋の「期待」に添えるべく書かれており、それはロダン美術館に対する大屋のアクションの成果といえるものです。これが公表されたことは当時衝撃的であり、彼らの日本向け文献の中では〈誠実さ〉において、今でも最も評価すべきものに思われます。

大屋はその後の著作でも、《地獄の門》をはじめとする松方コレクションの铸造と移動の問題、作品の歴史の解明の必要性を表明し、松方コレクション関連の在外資料収集のため、二〇〇八～〇九年にフランス国立美術館資料室で調査を行いました。二〇一三年六月、大屋が滞在中のパリで急性骨髄性白血病を発病して急逝したと聞いたとき、私はこれほどがっかりしたことはありません。

黒川弘毅（くろかわ・ひろたけ）氏

武蔵野美術大学造形学部彫刻学科教授。一九八〇年代より彫刻家として国内外で作品を発表するとともに、彫刻の保存とブロンズ铸造についても研究を行っている。黒川氏は、当館のプロムナードに設置された野外作品等のメンテナンスや保存に長年携わっている。

私が大屋美那（旧姓尾島）を知ったのは、彼女が静岡県立美術館の学芸員としてロダンの開設準備をしていた頃です。とくに印象に残っているのはロダン館開館の一九九四年、フランスやアメリカの著名なロダン研究者たちが顔をそろえて開催されたシンポジウム「ロダン芸術におけるモダンティーン」で、J・タンコックとともに大屋が司会を務めたときです。日本の研究者やタンコックが抱くロダンのブロンズ铸造に関する問題意識が示され、これをめぐるロダン美術館館長J・ヴィランとの議論のなかでロダン美術館の〈事業方針〉を窺い知れたのは、大屋が真剣に取り組んだ企画の収穫でした。

二年後、大屋は西洋美術館に籍を移し、展覧会の企画や松方コレクションの研究とともに、所蔵するロダンの铸造問題の解明にも精力を傾けました。

静岡県立美術館で二〇〇一年に開催された展覧会の図録『ロダンと日本』に、C・ビュレイウリブ（ロダン美術館資料室学芸員）の論文「松方とロ

ダン美術館…あるコレクションをめぐる災厄」が大屋の翻訳で掲載されました。この中で、それ以前には推測するしかなかった事柄―《地獄の門》第一铸造のアメリカへの売却を含む松方コレクションの「パリ・ロダン美術館での保管期間内の作品の移動」、すなわち松方が本来得るべきブロンズの転売と後の铸造への入れ替えの事実が記され、それに関するロダン美術館とルール美術館資料室にある文書資料が示されました。

この前年、大屋は「松方コレクションのロダン彫刻に関する調査報告―九三七年から一九四八年までの作品保管リストと国立西洋美術館所蔵の《エヴァ》の铸造について」を『西洋美術館紀要』に掲載しました。大屋は論文の註で、「『ロダンと日本』展の開催が予定されており、その図録の中で、ロダン美術館に保管されていた松方コレクションのロダン彫刻について、パリ・ロダン美術館側が論文を執筆することになっており、松方が購入したロダン

彫刻の全体像について資料が公開されることを期待している」と述べていました。大屋は本文の中で、一九二八年に松方のために铸造された「岩のないエヴァ」が転売され、西洋美術館の《エヴァ》は、これの「入れ替え」で松方コレクション用に異なるモデルから一九四五年に铸造された「岩の上のエヴァ」であることを、ロダン美術館の文書資料から明らかにしました。これが可能となったのは、フランスの国立美術館のアーカイブ公開姿勢に変化が起き、日本の研究者がアクセスする際に管理担当者の協力が得られるようになったからです。この論文は、ロダン美術館が保管した松方コレクションに関する事実の解明に向けて、これまであまり進展しなかった日本側からのアプローチが積極的に開始されたことを示すとともに、松方コレクションのほかのブロンズについても铸造の問題があることを表明した点で大きな意義を持ちます。

ビュレイウリブの論文は、日本側

## 古代への情熱 —18世紀イタリア・考古学と 芸術の出会い

10月2日(水)～11月17日(日)

の遺産は、数多くの芸術家を魅了し、大いなる創作源となりました。

本展は、都市ローマと南イタリアに残る古代ローマの遺産を主題・モチーフとして、古代に寄せる芸術家の情熱から生まれた多様な展開を、十六世紀から十八世紀にかけてたどる試みです。古代ローマの中心地であった都市ローマでは、中世からルネサンスにかけて教皇庁の主導で都市改造が進むにつれ、多くの古代遺跡が破壊されました。ローマの廃墟化は、逆に古代の遺構や遺物への関心の誕生・成長を人文主義者らの中に促すことになりました。十五世紀から十六世紀には、そうした古代遺産に関する記述や古代遺跡の実測を伴う体系的調査が始まり、また発見された古物収集が盛んになります。十八世紀になると、南イタリアのポンペイやヘルクラナムなどの遺跡の再発見・発掘が、実証的な考古学確立の道を準備し、芸術分野にも大きな刺激を与えました。

芸術家によって描かれた古代は、時代により、作家の視線やアプローチの仕方により、実に様々です。廃

墟となった遺跡の克明な描写やあるべき姿を推測した復元図、古代の建築物を背景とする理想的風景画に始まり、古代の名所旧跡を描いた景観画、古代ローマにヒントを得た綺想画や装飾デザインが開花する一方、芸術家による考証作業に基づく著作も発表されます。さらに、古代作品を版画で複製した豪華な図版集や旅行記の出版も活発に行われます。これらは、グランド・ツアーでイタリアを訪れる外国人らの事前の参考書、または現地でのガイドブックやお土産となり、欧州全域の人口に膾炙することになりました。

当館は、収集方針のひとつに「十

七世紀以降の東西の風景画」を掲げ、ピラネージやその周辺の作家の作品を数多く所蔵しており、これらコレクションを元に、「ローマ散策展」(二〇〇一年)、「ローマ散策展 Part II」(二〇〇四年)などの企画展を過去に開催してきました。本展はこうした系譜を踏まえ、新たに南イタリアも視野に入れて、都市ローマと南イタリアの二部構成により、考古学と芸術との出会いから誕生した二百点以上の作品をご紹介します。想像力に満ちた作品から広がる世界をお楽しみいただければ幸いです。

(上席学芸員 南美幸)

\*会期中、一部展示替えがあります。



ジョヴァンニ・パオロ・パニーニ《古代建築と彫刻のカプリッチョ》国立西洋美術館



ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ『ローマの景観』より「マルケルス劇場」静岡県立美術館

# やなぎみわ展 神話機械

2019年12月10日(火)～  
2020年2月24日(月・振休)

本展は、美術と演劇の両分野で活躍するやなぎみわ氏（一九六七～）の、美術館では十年ぶりとなる個展です。やなぎ氏は「エレベーター・ガール」「マイ・グランドマザーズ」「フェアリー・テール」等の写真作品で高く評価され、二〇〇九年にはヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展の日本館代表として出品しました。ここで簡単に作品を紹介すると、「エレベーター・ガール」は、初期の代表的なシリーズで、規格化した工業製品のようにも見える案内嬢が映し出されたディストピア的な光景が魅力的な作品です。その他にも、公募したモデルに「五〇年後の理想の自分」を想像してもらい、特殊メイクやC

Gで未来の姿を作り出した「マイ・グランドマザーズ」、少女と老女が登場する寓話をモチーフに老若の関係を攪乱する「フェアリー・テール」など、いずれも性別や年齢等の普遍的なテーマを元に発想した豊かなイメージが、見る者を惹きつけます。その後、二〇一〇年からは、やなぎ氏は演劇活動も活発に行うようになります。「1924」三部作では、美術・演劇・舞踊等の前衛表現で知られる村山知義らが登場人物となり、日本の近代劇場である築地小劇場が舞台となりました。中上健次原作の野外劇『日輪の翼』は、特注の台湾製ステージトレーラーを舞台に各地で

演じられ、大きな話題を呼びました。本展では、これらの代表的写真シリーズや演劇のアーカイブを展示し、さらに、新作の桃を撮影した写真シリーズ「女神と男神が桃の木の木の下で別れる」や、全くの新しい試みであるマシン作品《神話機械》（図1）等が登場します。

「女神と男神が桃の木の下で別れる」は、日本神話のイザナミとイザナギの別離を題材とした写真です。

黄泉の国から現世に戻る途中、イザナギがイザナミに桃の実を投げつけた逸話に基づきます。図版は三枚組の《女神と男神が桃の木の下で別れる…川中島》（図2）のうちの一枚です。暗闇に浮かび上がる、熟した桃の実が、異界の空気をまとっているようにも感じられます。

《神話機械》は演劇と関連するもので、「モバイル・シアター・プロジェクト」と題し、やなぎ氏と各地の大学等が協働して製作した機械仕掛けの作品になります。本作は言わば、人間の俳優にかわる自律的な演劇機械であり、それぞれ特徴的な動きをする三台のサブマシンと、その間を自走し、発光し、音声を流す等の様々な機能を持ったメインマシン一台からなります。これら四台のマシンが、連動し、生み出す演劇空間は、これまでに無い体験を与えてくれることでしょう。



図1 やなぎみわ《神話機械・ムネメー（投擲マシン）》2019年  
被災地からの発信・心の復興支援事業実行委員会蔵 撮影：表恒匡



図2 やなぎみわ《女神と男神が桃の木の下で別れる：川中島》(部分)2016年 作家蔵

また、二月二一日、二二日には、マシン作品《神話機械》と高山のえみ氏が共演するライブパフォーマンス『MM』の開催も予定されています。この演劇作品はシェイクスピアの『ハムレット』や、ドイツ出身の劇作家、演出家ハイナー・ミュラーによる『ハムレットマシン』『メデアマテリアル』などを下敷きとしています。

やなぎの代表作から新しい試みまで、見どころの多い展覧会となっています。皆様お誘い合わせの上、ぜひご来場ください。

(主任学芸員 植松篤)

# ピラネージ

## 《ローマ及びカンポ・マルツィオの地図》の解説文に見られる制作態度について

上席学芸員 新田建史

ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ（一七二〇～一七七八）は、十八世紀のローマで活躍した版画家、建築家、そして考古学者である。一七二〇年にヴェネツィア近郊メストレで生まれた彼は、二十歳の頃にローマにやってきて、数回故郷に帰るものの、ローマに定住し、都市ローマの風景や、古代ローマの遺構等を描き続けて生涯を終えた。

彼の後期の作品に、《ローマ及びカンポ・マルツィオの地図》（*Pianta di Roma e del Campo Marzio*）がある（図1）。カンポ・マルツィオとは、「マルスの野」を意味するラテン語のイタリア語読みで、ローマを流れる

テヴェレ河の左岸から、カピトリノの丘と、クイリナーレの丘に挟まれる一帯を指している。地図に記載されている範囲は、おおむねアウレリアヌスの城壁の内側である。加えて、ポポロ門からローマの北側をミルヴィオ橋まで記載しており、カンポ・マルツィオ地区の遺構については、小さな別図を画面右下に付けてある。また、東西南北の向きが、今日の一般的な地図とは逆で、上側が南南東、下側が北北西に当たる。

地図とは言っても、同時代の建物を案内するものではなく、都市ローマにある古代遺跡を詳細に記した地図である。当時の建物や道を示した上で、そこにピラネージが調べ上げた古代ローマの遺構の位置を示している。地図の周りには遺構のインデックスが掲載されており、そこには遺構の名称と簡単な解説が付されている。本作品以前にピラネージが手掛けた『ローマの景観（ *Vedute di Roma*）』（一七四六～）『ローマの古代遺跡（ *Antichità romane*）』（一七五六年）、『ローマ人の壮麗と建築（ *Della magnificenza ed architettura de' Romani*）』（一七六一年）、『古代ローマのカンプス・マルティウス（ *Il campo marzio dell'antica Roma*）』（一七六二年）等

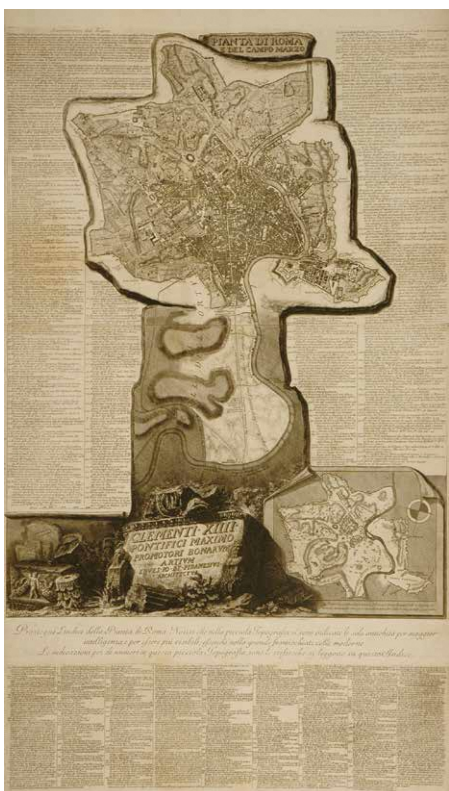


図1 ピラネージ《ローマ及びカンポ・マルツィオの地図》全図



図2 《ローマ及びカンポ・マルツィオの地図》下図部分  
画面左端中央がコロッセオ、右端下近くがティベリーナ島

の作品とも対応しており、「」を見よ」という形で参照ページが示してあるものもある。このインデックスは1番から402番までの番号を振られているのだが、よく見ていくと、何箇所かで番号が飛んでいる。まず45番と46番の間にB、C、そして68番と69番の間にD、210番と211番の間にE、104番と105番の間にF、そして178番は177番の次に順番通り書かれているが、「この興味深い部分については、インデックス末尾を見よ」一書いてあり、解説文の本文は一番最後に回されているのである。

何故、このような混乱が生じているのか、それを考えるために、まずこれらの箇所に書かれているものを確認してみる。多少読み易くなると思われるので、挿入されたアルファベットの項目だけではなく、前後の項目も挙げる。上下の地図、両方に場所を記載しているのか、片方だけでも併せて挙げる。「」内が解説文の訳文である。178番は、インデックス末尾の解説文を挙げた。

45番…「皇帝達のムタトリウム遺構」上下に表記有  
B…「網状にしてあるのが、地下にある円形

の遺構であり、その上には現代の建物が建っている」上下に表記有  
C…「ニコリーニ家のぶどう畑の中にある、同じく皇帝達のムタトリウム遺構」下図のみ表記

46番…「アヴェンティノの坂を穏やかにするための建築物」上下に表記有  
68番…「キルクス・マクシムスの、段状の観客席の、円い形をした基礎、この上には道路と、製粉管理所が建っている」上下に表記有

D…「先述の丸い基礎の上に小さな食堂と家畜小屋が建てられており、インガミ家のぶどう畑の中にある」上図のみ表記有  
69番…「キルクス・マクシムスの場所」上下に表記有

210…「ガイウス・プブリキウス・ピブルスの墓所の遺構、コルヴィの市場の向かい側にあり、マルフォリオのへの坂の基部になつている」下図のみ表記有

E…「クラウディアの氏族の墓、もしくは他の者がそう望んでいるように、トラヤヌスのフォルムの一部」上下に表記有

211…「サン・マルコ聖堂」上図のみ表記有  
104番…「いとも尊き教皇聖下のサン・ジョ

ヨヴァンニ・デイ・デイオ聖堂のぶどう畑にある、ネロの屋敷の下層部分の遺構」上下に表記有

F…「ロンコーニ家の菜園の中にある、パラティノの丘の上にあるネロの屋敷のペリスティリウム、「ローマの古代遺跡」

第1巻第36図、小

図1に図がある」下図のみ表記有

105番…「ヴィッラ・スパーダの中にある、先に述べたネロの家のペリスティリウム遺構」、「ローマの古代遺跡」第1巻第36図」上下に表記有

177番…「アウグストゥスによって建設された、ガイウスとルキウスの柱廊の遺構」中略」「ローマの古代遺跡」第5巻、「古代ローマのキャンパス・マルティウス」第4巻」下図のみ表記有

178番…「タルベアの岩に掘られた、ロープと呼ばれる牢獄、アネクス・マルティウスによって掘られ、セルウィウス・トゥッリウスによって掘られ、誤ってファウイスと呼ばれた「中略」」「古代ローマのキャンパス・マルティウス」第26図参照」下図のみ表記有

179番…「ガイウスとルキウスのバシリカ遺構」中略」「古代ローマのキャンパス・マルティウス」第14図、「ローマの古代遺跡」第4巻を見よ」上下に表記有

このように見てみると、ほとんどの場合、既に何らかの形で発表されたものであることが分かる。BとC、そしてDは、ここに記されていないが、『ローマの古代遺跡』の中で言及されているのである。ローマの遺構に固有番号を付けて、管理していた訳でもない。ということは、番号を飛ばして異なるデータを挿入したのには、何らかの理由があった筈である。

そこで改めて、記載されている内容を、以下に検討してみたい。

まずB及びCは、『ローマの古代遺跡』に192番として言及されているが、「地下にある円形の遺構」という記述は無く、本図で初めて登場する記述である。『古代ローマのキャンパス・マルティウス』第3図に、それと思われる描写があるものの、解説文は付され

ていない。

Dは、『ローマの古代遺跡』第1巻第35図小図1のHとして、「マラナもしくはクラブラ水道」として描かれている遺構であろう。これが本図ではキルクス・マクシムスの基礎としか記述されていないのは、ピラネージの考えが変わったことを示しているであろう。

Eは『ローマの古代遺跡』、『古代ローマのキャンパス・マルティウス』、『ローマの景観』等での言及が無く、新たに検討の進められた遺構かと思われる。

Fは、参照用に挙げられた『ローマの古代遺跡』の図と、その説明文を読んでみるとFの記述と同じ内容であることが分かる。また『古代ローマのキャンパス・マルティウス』を見てみると、同書第3図197番が、本図Fの記述と概ね一致するのだが、所在地がヴィラ・マニヤーニになっており、Fや『ローマの古代遺跡』で挙げる「ロンコーニ家の菜園」とは異なっている。むしろ、本図105番として表されている場所こそ、新出であり、参照すべきとして挙げられている『ローマの古代遺跡』の図版は、指定間違いかもしれない。

178番についての記述は非常に入念なものであるが、参照することになっている『古代ローマのキャンパス・マルティウス』では、この場所のことを「ファウイス」、もしくはカピトリノの地下に掘られた床暖房の遺構と呼んでいる。これに対して本図では、「誤ってファウイスと呼ばれ」とあり、ピラネージが考えを改めていることが分かる。

これらのことからピラネージが、従来とは意見を変えたものの、新たに発見したものについて、アルファベットで事項を挿入していることが分かる。通し番号になっていないのは、既に番号に従って版画制作が進んでいる過程で、事項を追加したからであろう。このことは彼が、書き込む情報を全てまとめてから描

き始めるのではなく、作業途中であっても必要とあらば随時変更を加えたことを示していると思われる。

ピラネージにとって版画は、ビジュアルな説得力を持つものであると同時に、速報性のあるメディアとしても意識されていたのではないか。今日のようなツイッターでもあれば、喜んで使っていたかもしれない。図版に付された解説文というささやかな部分からも、彼の制作態度がまた一つ見えてくるように思われる。

1 紙、エッチング、シート全体では1322×711mm、静岡県立美術館蔵、P.50-1302。レンネ番号は1994 WILTON-ELY, John, *Giovanni Battista Piranesi: the complete etchings*, San Francisco, CA, Alan Wofsky Fine Arts, 2 vols, 1008である。画面に年記は無いが、作品が教皇クレメンス14世(在位一七六九—一七七四年)に献呈されていることから、一七七四年までには成立していたと考えられる。

2 robur, -oris, n. ラテン語「セルウィウス・トゥッリウスがローマ市に作った地下牢」。

3 favisae, -arum, f. pl. ラテン語「神殿近くにあった地下貯蔵室」。

4 192. Avanzi nella vigna Cerniti del Mutatone di Cesare delineato nel frammento 46 dell'itografia antica riportato attorno alla presente Topografia generale, descritto nel rispettivo Indice allo stesso numero.

5 301. Avanzo nell'orto Ronconi del Peristilio della Casa Neroniana sul Palatino, dimostrato nella Tav. XXXVI di questo Tomo alla fig. 1

6 197. Avanzi del pristilo della casa Neroniana nella villa Magnani.

7 111に訳出していない部分では、隣接するマルケルス劇場の方に広がっていたという町の様子を詳述している。

8 ピラネージは、自作品のカタログも版画で制作し、ある程度点数がたままる度に書き込みを増やしていった。1994 Wilton-Ely, J. また、『ローマの景観』等の詞書も、版によって更新されることがある。

## 本の窓

ロバート・グレイヴス著  
多田智満子・赤井敏夫訳

『この私、クラウディウス』

みすず書房 二〇〇一年



「古代への情熱」展開連の書籍をご紹介します。タイトルのクラウディウスとは、古代ローマ帝国の第四代皇帝。スエトニウスの『ローマ皇帝伝』によれば、その前半生は「子どもの頃から青年時代にかけて、ほとんどその大半を難病に苦しめなかつたといえます。しかし、クローマエ(南イタリア)の巫女の謎めいた予言から始まるこの小説、血縁者が次々と抹殺される中、本人の意思とは裏腹に時の最高実力者に選ばれてしまうという運命の皮肉を、心理描写と歴史的事実を巧みに組み合わせながら、歴史家になりたかつたというクラウディウスによる自叙伝という洒落た手法で描き出します。秋の夜長にお勧めの一冊です。

(当館上席学芸員 南美幸)

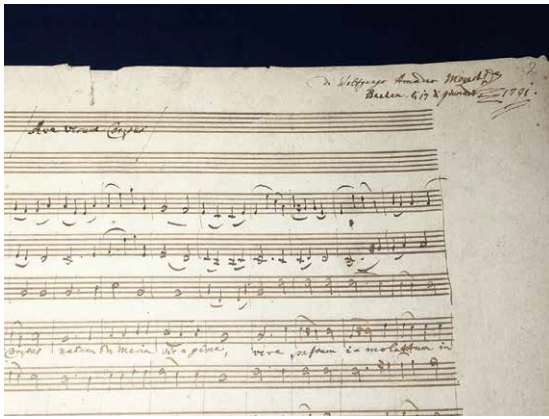
# モーツァルトのこと

副館長 櫻井昌明

この四月に副館長に着任しました櫻井です。よろしくお願ひします。美術館に勤務するのは初めてですが、大好きな絵に囲まながら、精一杯頑張ります。

私は、絵を鑑賞することは好きでも、画才には全く恵まれませんでした。そこで、高校では brass バンドに入部し、フルートを始めました。フルートも容易には上達しませんが、それでも、現在まで続けることができたのは、モーツァルトを自ら演奏することが無上の喜びだったからです。

二十歳の時、彼のオペラ『フィガロの結婚』を聴きました。この曲を聴くまでは、モーツァルトの音楽を、単に軽やかで、華



モーツァルトの署名の下に1791と作曲年が記されている

やかなだけの音楽だと思っていました。音楽芸術はそれ自体、抽象的であって、具体的に何を表現しているのかわかりません。しかし、オペラには台詞があり、登場人物の感情が言葉によって示されます。その感情を、作曲家は音楽で表現するのです。

私は『フィガロ』を聴いて驚きました。なぜなら、音楽から人の喜びや悲しみが溢れ出てきたからです。一領民にすぎないフィガロが、新妻を奪おうとする横暴な領主に抵抗します。幸せを願うフィガロの必死の思いを、モーツァルトは気高く、美しい音楽をもつて支えていたのです。

その時から、大学生の私は学校に通うのもそこそこに、演奏会場を巡り、あるいはレコードを買い込んで、ひたすらモーツァルトを聴きまわりました。社会人となつてからは楽譜を集め、彼の全作品を揃えました。更に幸いなことに、モーツァルトには自筆の楽譜が数多く残されているのです。自筆譜をそのまま複写印刷した楽譜をファクシミリと呼びますが、私は、モーツァルトのファクシミリの収集も始めました。

写真は、彼が亡くなる年に作曲した『アヴェ・ヴェルム・コルプス』、静けさを音に表すかのような美しい宗教曲です。曲の美しさそのままに彼の筆跡も美しく、楽譜自体が芸術作品のように私には思われます。

## 利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)  
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)

## アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡I.C.、清水I.C.から約25分 日本平久能山スマートI.C.から約15分
- ◎新東名高速道路 新静岡I.C.から約25分

ウェブサイト：<http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>

## 無料託児サービス

毎週日曜日および祝日10:30～15:30  
対象 6ヶ月～小学校就学前

※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2

総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767  
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



## 静岡県立美術館

Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

## 「ロダンウィーク」イベント・スケジュール

※11月1日(金)～4日(月・振)はロダン館観覧無料

ちよこつと体験講座 ミニ考える人づくり

10月31日(木)～11月3日(日)

10:00～12:00、13:00～15:30

本館エントランス 申込不要

ミニ考える人の作成

サウンドインスタレーション「Homage à Rodin II」

11月1日(金)～11月4日(月・振) ロダン館 申込不要

ロダンの彫刻作品と静岡大学長谷川慶岳氏作曲の音楽のコラボ

「考える人になるー美術のなかの男性表現について」

11月2日(土)14:00～16:30 美術館講堂 申込不要

「日本一の饒舌美術史家」宮下規久朗氏と「異界からお招きする」ロダン先生、

当館館長による美術のなかの男性表現をテーマにした鼎談

クイズラリー

11月2日(土)～4日(月・振)10:00～15:00 要企画展観覧料

「古代への情熱ー18世紀イタリア・考古学と芸術の出会い」展に入場して、関連

したクイズに答えた方に先着で、オリジナルグッズ(缶バッジ)をプレゼント

ギャラリートーク

11月2日(土)11:30～ ロダン館 申込不要

静岡大学の学生によるロダン作品の解説

丘の上の「ロダンマルシェ」

11月3日(日)10:00～16:00

美術館正面広場 申込不要(荒天中止)

草薙マルシェ実行委員会がプロデュースする「フランス風のグルメ、雑貨&

パフォーマンス」

「静岡の名手たち」ロダン賞コンサート

11月3日(日)14:00～ ロダン館 申込不要

AOI「静岡の名手たち」ロダン賞受賞者によるピアノの演奏

友の会ひろば

11月3日(日)10:00～15:30 美術館正面玄関前 申込不要(小雨決行)

常葉大学生と県内作家によるワークショップ等

ロダンと聴く、愛と死の物語

11月4日(月・振)14:00～ ロダン館 申込不要

静岡大学協力によるコンサート

草薙ツアーグループ「呈茶サービス」

11月4日(月・振)11:00～14:00 美術館正面玄関前 申込不要

美術館ボランティアによる美術館の茶畑でとれたお茶のサービス

めぐりアート静岡2019

10月22日(火・祝)～11月10日(日) 本館エントランス

静岡市内の様々な会場をめぐりながら今を生きるアートを楽しむ展覧会

友の会のご案内 入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。